

文学

イコンジェ
李建濟 (立命館大学)ソウンジュ
徐銀珠 著

『文学、教養の時間』(ソミヨン出版、2014年)

서은주 저 『문학, 교양의 시간』(소명출판, 2014년)

柄谷行人がいわゆる「近代文学の終焉」を論じて以来、韓国の文壇では「文学の危機」と「教養の不在」について熱い議論が交わされてきた。こうした議論にたいして著者は、危機を迎えているのは文学全体ではなく特定の文学的範疇もしくは傾向であって、教養の不在というよりは変化する現実にあわせて教養の内容も変わりつつあるだけだという見方を紹介する。著者は、「文学の危機と教養の不在を言説化する人々こそが、近代的エリート主義にとらわれた時代錯誤な人々」なのかもしれないと言う。文学と教養をキーワードとして著された本書はこうした相反する二つの立場を行き来して、それらを取りまく理想と現実の二元性を解き明かしてゆく。

人間が備えるべき総体的な徳目としての教養は、具体的な現実のなかでは自己顕示に汲々とした即物性であったり、「創られた普遍性」に振り回される非主体性である可能性が高い。もちろん教養を取りまく理想と現実の二元性はどの社会にも存在する。問題は、植民地と分断を経て開発主義を至上課題に据えた韓国社会において、こうした教養の二元性がより深刻な様相を持って現れるという点である。

残念ながら植民地と分断を経験した韓国社会では、そうした「普遍性」はたいてい選択と排除を経て翻訳されたものであったり、理念的に統制されたものであった。「文学」という媒介を通して「教養の次元」を考察する本書の問題意識はここを出発点としている。「文学」と「教養」の問題を近現代韓国の文学場や学術場(“場”はブルデュー(Bourdieu)の用語として、原語は“champ”)、そして大学のような制度の次元と関連させて考察することで、文学の現在、教養の現在を改めて省察することが本書の狙いである。

本書の第一部では植民地期を対象に、韓国近代文学の形成にとって外国文学がどのような存在として、もしくはいかなる意味を持つものとして位置づけられるのかを論じている。ここでは外国文学の翻訳や受容過程で必然的に直面する言語の問題とともに、文学の位階化の中での民族文学と世界文学の拮抗、植民性と脱植民性の錯綜といった問題を主に扱っている。「翻訳と文学場のナショナルイティ—海外文学派を中心として」と「外国文学の受容の座標—世界/民族、文学」では海外文学派を取り上げている。彼らは「西欧追従的」だという嫌疑を向けられても朝鮮語による「言語ナショナリズム」を追求し、ファシズムに対する拒否感や、「世界文学」という「普遍性」に魅了されたコスモポリタンの志向性を棄てなかったが、結局は親日文学のような植民地的なしがらみにとらわれるしかなかったという。「日本文学の言表化と植民地文学の内面」では、植民地の文人たちによる日本文学の言表化は、必然的に朝鮮文学の植民性と脱植民性の錯綜の様相を問題として映し出していると論じる。「ファシズム期外国文学の存在

方式と教養—『人文評論』を中心として」では、『人文評論』を中心にファシズム期の外国文学の存在方式を教養との関係の中で捉えようと試みている。著者はここで、『人文評論』はファシズム期の外国文学にとって理性的思惟を行いうる最後の砦として一時的に機能したが、結果的には合理性から脱却してゆく教養の不可能性を改めて確認することになったと論じる。

本書の第二部では、解放後の国家形成と分断状況の中で文学と教養が大学の制度的・学術的体制の整備過程にどのように組み込まれていったのか、または大学の外の学術場においてはどのようにその位相を形成したのかを考察している。「教養としての「文学概論」と「知」の標準化」では、文学が大学という制度に編入されることで享受の対象から知識の対象へと転化し、その中で「文学概論」という形式が西欧文学を普遍的なものとして確定・流布する確固たる制度として定着してゆく様を見せてくれる。「1950年代の大学と教養読者」では、戦後に量的に急成長する大学と学術場を対象に、教養の概念や教養の価値などがどのように議論されたのかを検討し、教養に対する大衆の熱い思いを分析している。著者は身体で覚える文化的教養が不可能となった戦後の状況の中で、韓国の教養は精神の次元でのみ病的に肥大した面があると指摘している。それとは対照的に、田惠麟^{チョンヘリン}の場合にはむしろ外国留学の経験のあるインテリ女性という例外性が彼女を当時の文学制度の外部に位置づけることとなったと指摘しているのが、「境界の外の文学人—「田惠麟」というテキスト」である。田惠麟の事例は文学が喚起するどのような部分に大衆が惹き付けられるのかを良く見せてくれると著者は述べている。「1970年代の文学社会学の言説地形」では文学社会学についての1970年代の言説の場の争点を分析し、文学とは何なのかという根本的な問いに対する当時の研究者たちの問題意識に光を当てている。

しばらく前から人文学に対する社会的関心が高まってはいるが、それもやはり危機の別の表現であることを考慮すれば、「人文学のブーム」はまだ到来していない、単なる希望にすぎないのではないかという考えも浮かぶ昨今、文学という媒介を通して教養の次元を真摯に考察した研究書である『文学、教養の時間』が、この乾きを癒してくれると期待したい。

[日本語訳：朴伸次]



チョンジュア
鄭珠娥 著

『西北文学とローカリティー—理想主義と共同体の言語』

(ソミョン出版、2014年)

정주아 지 『서북문학과 로컬리티—이상주의와 공동체의 언어』 (소명출판, 2014년)

場所、地域は人間の生が具体的に形成される土台であり構造的な原点であるため、文学研究において「地域性 (locality)」という概念が重要なものとなる。まさにこの地域性の観点から韓国近代の中心にいた文人たちを研究した本書は、著者の博士学位論文を整理し出版したものである。

本書は朝鮮西北地域の文人たちが単純に地理的な同質感・連帯感という地縁を超えて、何らかの精神的連帯感でつながっていたのではないかという疑問から出発するのだが、その疑問の出発点にあるのがまさに「西北」という地域の特異性なのである。「西北」は単に地域を区分するための中立的な用語ではなかった。朝鮮の中心・南部で安定した生活を送っていた人々は、国境地帯の住民がオランケ（朝鮮国境の北部の野蛮人）と内通するかもしれないという不安感を持っており、また北方地域は流刑に処された罪人や卑賤な奴婢の子孫たちが住んでいる地であるという偏見を持っていた。そのため、朝鮮時代を通して「西北」という地域は単一の国家の内部において排除・疎外された集団、すなわち「内部に存在する外部」だったのである。

本書の第一部である「西北のローカリティーと西北人の生」では、韓日併合を前後して西北地域の時空間的性格がどのように再編されたのかを論じている。朝鮮の中心・南部と西北との間の中心と周辺の関係は、併合直前には「転覆」の様相を見せるようになる。官職にもまず登用されることの無かった西北人たちが近代の文壇の中心に登場し、京城のかわりに平壤などの西北の都市が民族運動の中心地になっていったのだが、実際に中心と周辺の構造を転覆させたのはまさに「新民会」運動などに見られた「理想主義」であった。

「方外地」とみなされた西北は近代の開化期に劇的な転換期を迎えた。改新教と天道教の主導の下で新教育事業が始まり、京義線と地域資源のおかげで産業が発達するなかで、西北は西欧モデルの文明言説の恩恵を最も受けた地域となった。こうした過程で変化と進歩が救国の実践綱領として認識されるようになり、西北は民族主義運動の本山へと成長していった。長期間辺境に存在した西北が韓半島の精神的中心になるまさにこの転換を、本書は「西友学会」と『西友』、『西北学会月報』といった記録を用いて描き出す。

また、西北の文人たちの作品によく登場する具体的な場所の表象などから西北の文壇を形成する土壌を分析しているが、その代表的なものが平壤、大同江、定州だ。西北の文人たちの作品に出てくるこうした場所は、李光洙や安昌浩といった人々に「少年時代の理想」という精神的な土台を提供し、また同時に「理想の挫折」という痛みを与えもした。李光洙の『無情』や廉想涉の『標本室のアオガエル』など、西北の文人たちの具体的な作品をもとに展開される議論を通じて私たちは、西北の文人たちが共同体内部の異邦人であった西北人の解冤（恨を解く）の欲求を継承してはいるが、その解冤の方式が身分上昇

への欲求や集団利己主義ではなく、差別と排除を再生産することのない共同体の倫理への憧れとして表現していることを知ることになる。

本書の第二部「西北青年の系譜と召命意識としての文学」では、地域と地域アイデンティティーに対する基本的な論理に基づいて西北出身の文人たちを具体的に分析している。そこから李光洙および『創造』派の文学論をもとに、個性の自覚と共同体的信念の結合である「普遍的自覚」の論理が、安昌浩の青年論やキリスト教的言語観によって拡散されてゆく点を明らかにしている。

ここでは共同体理想主義を実現する主体として名を呼ばれた青年たちが、いわゆる「西北青年」としての自我像を内面化し、世代的課題を受け入れる様子を描いているのだが、そうした青年たちがまさに安昌浩や李光洙、そして田榮澤^{チョンヨンテク}、朱耀翰^{チュヨハン}、金東仁^{キムドンイン}のような『創造』派の文人たちであった。本書はこれら作家たちと彼らの作品を検討することで、西北の文人たちが韓国の近代文学史において個性の問題を他の誰よりも鋭敏に自覚し、集団の中での個人の存在方式を問う文学芸術と出会った者たちであり、近代の西北地域が「宗教熱」にうかされた地域として差別されたことと照らし合わせて、彼らが共同体理想主義へ向かおうとする修行者的な集団であったと分析してみせる。

この「共同体理想主義」こそが、西北の文人たちが西北という地域を土台として一つに結束することのできた鍵なのであったが、最後に本書の第三部「西北青年の脱領土的冒険と自己帰還の構造」では、1920年代に西北青年たちが共有した「理想主義」の具現の様相をとりあげて、特に西北の文人たちの共同体理想主義が世界主義や普遍主義へとつながる点を重点的に考察している。そのために文学雑誌『朝鮮文壇』と興土団の国内支部であった修養同友会の機関誌『東光』が主なテキストとして用いられている。著者は西北の文人が主導したこの二つの雑誌を中心に、西北地域の脱地域的な普遍指向性が民族の離散の現状と相俟って文明地理学的な構想として表れたが、国際情勢の変化によってすぐさま挫折してしまう様子を1920年代民族主義文学運動と共に論じている。

結論として著者は、西北人の「共同体理想主義」に込められている「脱ローカル」の志向について言及している。長い間排除されてきた西北と西北人は改革の欲求と外部への開放性を持っていたため、国家が消滅しつつあるとき、衰亡する国家に未練を持つかわりに新しい共同体の理想を育むことになった。ただ「国家」と「領土」に執着するのではなく、国境地帯を行き来する「西北間島」の移民者、流浪民、亡命者などを含めた存在としての朝鮮流民集団がめいめいに定着した場所に一つの共同体と共同体倫理を創ろうとした試みがまさに西北人の共同体理想主義だったのである。この脱ローカルの傾向を著者は「西北発コスモポリタニズム」と名付けている。集団主義の画一的な閉鎖性を歴史的に経験した疎外された集団において改めて導き出されたそのような共同体理想主義、そして文化運動と政治社会運動の同一性を中心とした西北発民族主義文学論についての著者の研究は、韓国近代民族主義文学の原型となる出発点がどこにあるのかの再検討を促してくれるものである。

[日本語訳：朴伸次]